知恩院蔵『宗名一件抜書』について

平　祐　史

安永三年八月　浅草・築地両本願寺輪番が寺社奉行宛に浄土真宗の宗名を全国一淮に使用したい旨を求めて差出した口上書に端を発して、浄土宗と両本願寺との間に十六年に及ぶ宗名に関する論争が起った。これに関する研究は、山田文昭著『真宗史稿』（昭和九・五・二八刊）第三編第四章「宗名の諍論」、辻善之助著『日本仏教史』近世篇之三、第十章第十節「仏教の形式化　其四　新義異義の禁止」（昭和二九・四刊）、本願寺史料研究所編『本願寺史』第二巻第三章第七節「宗名の論争」（昭和四二・三刊）、坪井俊映著『法然浄土教の研究――伝統と自証について――』第五章第一節四「宗名争い」（昭和五二・二刊）などを挙げることができる。

就中、辻氏の『日本仏教史』及び『本願寺史』が、この事件の顚末について極めてくわしく経過を祥述している。けれども、両書ともに啓蒙的意図を備えた著述の性格上、煩を避けるために旁引の史料は根本史料を挙げるのではなく、史料の趣意を取って敍述されているため、後学の研究に資するには甚だもの足りないきらいがある。ただ両書とも典拠を明示しているので大いに参考に供することはできる。ここで両者の利用した関係史料をあげて見ると、まず辻氏の『日本仏教史』の場合は、次の通りである。

浄土真宗御宗名故障書之弾文并雑録

浄土真宗宗名故障書幷雑録
備後鞆阿弥陀寺所蔵「浄土真宗宗名一件」
浄土真宗御宗名弁別窺書
彰考館本「一向宗宗名論訴」
浄土真宗御称号証書写
浄土真宗宗名故障書幷雑録
寺社奉行記録
浄土真宗復真訣
非　禿　章
宗名弁偽録余
甲子夜話巻九二

などである。次に『本願寺史』においては、

本山所蔵文書
御宗号一件略書
宗名故障者並雑録
浄土真宗一向宗号次第便覧
宗名一件
浄土宗真宗宗名一件書類
村上家蔵「山中家記」

顕　真　弁

宗号弁偽録余

甲子夜話巻九二

などを旁引敍述している。これらの文書・記録類は、いずれも各々の本山や関係機関に奥深く襲蔵され、飜印活字化されていない未公開のもので、誰れでも容易に閲覧することができず、研究を進める上で甚だ不便である。

こうした宗名一件に関する文書・記録類の中にあって、この種の類書の写本を活字公刊した数少ないものとして、柏原祐泉編『真宗史料集成』第十巻所収の『宗名往復録』があり、これは容易に披閲することができるので、研究者にとって甚だ有益である。

今回紹介する『宗名一件抜書』は、知恩院所蔵の写本で、その形状は、縦二八センチ、横二〇センチ、本文一四三丁よりなる袋綴（明朝綴）で、表紙には題簽はなく、外題内題ともに「宗名一件抜書」とそのまま墨書されている。内容は安永三年十月より同八年正月までの総本山知恩院・増上寺・各本山・檀林・寺社奉行などとの往復書翰の書留と本願寺例証書写が収録されている。但し後者の本願寺例証書写の末尾に近い部分が途切れ、すぐに裏表紙となっている。従って続きの部分は別冊に所収されているものか、或は紛失したものか不明である。今後の調査を待たねばならない。書写の時期は恐らく安永八年より程遠くない時期に知恩院役者によって写書されたものと考えられる。

増上寺所蔵の「宗名弁偽録余」が安永七年から同十年までの書留とされているから、本書はその前半部に当るものとも考えられ、これを合すれば、ほぼ一貫した宗名一件に関する浄土宗側の貴重な記録となると云わねばならないだろう。従来、宗名一件に関する研究は当事者の真宗において積極的に取り組まれてきた。これに比して浄土宗においては、その教団史においてもあまり本格的に取り挙げられた形跡はない。こうした意味で、浄土宗側史料を活用して、再度見直しを計る必要があろうと思われる。

付記

本書の解読飜刻は、昭和六十一年度より六十三年度前期まで、大学院文学研究科日本史学専攻（博士前期課程）の演習において取り挙げ順次輪読し解読したもので、次の学生諸君がこれに参加したので、その名を録しておく。なお不備誤謬の責任は一切監修校訂の筆者にあることは云うまでもない。

佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻学生、浅野和敏・朝比奈太郎・大塚清史（以上六十一年度―六十二年度）劉建強（六十一年度―六十三年度前期）荒川良治・西口善則（以上六十二年度―六十三年度前期（東高志・工藤美智・貝英幸・戸島博男・鈴木芳道（以上六十三年度前期）

（　）内は参加年度を示す。

知恩院蔵『宗名一件抜書』（上）

（表紙）

宗名一件抜書

（一）

安永三午年十月十八日御掛り寺社司松平伊賀守殿

当山大僧正ゟ縁山大僧正江被進候御直書

今般両本願寺より公儀江願出候者、彼門徒自今浄土真宗与称し度旨、依之於松平伊賀守殿右願之趣今宗におゐて、相障筋無之哉与被相尋候ニ付、決而相障筋御申立有之處、又其趣書付差出候様に被仰渡、此儀一宗に相障り不容易事故、其御役所より当山役所等江茂御掛合、正月檀林中会談之上、相障筋御書付可被差出之由入御意候、微密之御取計御尤之御事と致承知候、因茲愚老所存之趣茂内々粗相記し、御心得之一筋にも可相成哉と備寛覧（カ）候

一従来一向宗と称し来候処、若今度相改浄土真宗と茂称し候様ニ相成候時者、圓光大師御開宗以来伝々正統之浄土宗今日迄真偽仮実の沙汰にも一向不及相続致来、宗門此節自然と偽宗仮宗とも相成に候様相聞候、惣而一宗之僧徒甚以倒惑痛心之事ニ候、別而当浄土宗者元来真実真宗ニ候故、公儀御代々様御宗門に候、此節卒爾真偽仮実胡乱之様に相成候而ハ、公儀江対し奉り甚以恐入慨痛仕候事ニ御坐候、其上天下の仏法自他共に人々分相応之佛制を相守僧徒にて、宗門をも建立致候事ニ候、然者若在俗同然の者江浄土宗なとゝ申宗名御免も有之候時者、分之佛制を相守候僧侶非評茂難黙止候事ニ候。

一圓光大師御開宗以来唯浄土宗与称し候者、当流正統之外無之、依而当山宝庫奉納の勅修御伝及び後柏原幷ニ正親町院ゟ当山江被下置候浄土宗惣本山之勅書、又元禄以来大師江三度諡号の勅書等唯浄土宗与被下、別而東照宮様幷尓台徳院様ゟ被下置候御条目にも、浄土宗

諸法度与有之、其中之御文言皆浄土宗与計被成下候事、早竟当宗門之外紛乱いたし候、浄土宗門無之故、数度之勅書・御条目類にも、唯浄土宗与被成下候事ニ候、然に其余念仏弘通の宗門も有之候得共、或者浄土西山流、又者時宗与公儀より御書出し有之、別而一向宗之事ハ御開国三河以来之御旧記等始当寺公儀の御書出し尓も、唯一向宗与計有之様ニ覚候、然者勅書・御条目等尓対し候而も、彼宗門ニ而浄土真宗などと称し候事ハ、決而相成間敷事に候。

一当浄土宗を真宗与申事ハ、御存知の通、道空両大師之御釈に分明にて、導師ハ真宗叵遇浄土宗之要路逢与のたまゐ、此浄土真宗者持戒如法に相守を真宗と申にて候、又圓光大師ハ大原談義の席にハ、真宗法門稍異古今と、又第二問の御答にハ、浄土者実教也、是故或云真宗或名真宗と御決択有之、此真宗と云も、肉食妻帯などの人の弘通する法を、浄土真宗と申にてハ無之事ニ候。其ゆへ云、何となれ者、勅修御伝廿九光明房へ被遣候一念義停止御起請文の中に、捨戒還俗淫肉等の非違を重ゝ御呵嘖被成候て、附仏法之外道とのたまひぬ。又三巻に挙る所の御制条の中にハ、無戒婬酒食肉等の逆悪を恐れさる事を御停止の事、此義勅修御伝の明文なり、誰か違抗する事を得ん、然ハ右の人ハ大師御在世の時より背宗擯出の事候へハ、今更浄土宗なとゝ申募るへき事ハ、一向名目者仏法中悪別の会釈も有之候得共、記主禅師発記にハ、真宗者指浄土法名真宗と釈し、冏師頌義等に真宗者当宗之異称と云へり。然ハ真宗の名目者偏に当宗に蒙リ、導師空師記主等代々相承の宗名にて、背宗擯斥の輩の称すへき宗名にてハ無之事ニ候、但し彼の親鸞・蓮如等の和讃類の中にハ、浄土真宗と書載候事数多相見へ候得共、此等ハ皆他の醜恥を不顧自家門中の現質にて、他宗他門一向共、許無之自分称呼の宗名にて候。

一慶長十三年十一月十一日之貴山勅願所綸旨御文言之内にも、武蔵国増上寺為勅願所須開真宗弘通之玄門と有之候由、此綸旨の写ハ愚老古記之中ニ相見へ候、定而相違有之間敷事と存候、然ハ勅書如此候得者当宗を真宗与申事者、公断無諍事候、弥他より競望すへき宗名にて候、尤此一条なと者別而根據明白相障筋之御申立

成立にて相成事と存候、右之外御勘弁併御評議之上にハ、種々御申立も可有之与存候得共、愚老存付之事前後不次第に粗相糺候、此中彼門徒江敵対毀謗の文言多く有之候得者、内々御披見之上、宜御取捨希事ニ候、余り無用の他人江者披見御咄も無之様ニ致度候、尤公儀江御書上之時も万事穏当に被仰此方之成立の事ハ、随分具ニ御書出し彼宗の非議非法の事強而御書載候事者、御遠慮可然歟与存候、彼門徒等ハ在俗同然後来何様の悪たくミいたし可申事も難斗、所詮公辺江穏便に被仰立彼等へ宗名御免さへ無之候得共、十分之事ニ御座候、若万一真宗与申宗名御免にも何れ茂彼宗之善悪得失御申立御諫訴可被成事与存候、勿論愚老なとも其所存ニ御座候、依之御披見之御労煩をも不顧老婆子苦口淳々前後不相構面語に申述候心にて書認候、宜御鑑察海涵宥恕可被下候　以上

十二月十一日　　檀誉御判

豊誉大僧正　　華頂山

(二)

安永四未年正月増上寺役者ゟ公儀江差出候書付之写

覚

此度一向宗門京都両本願寺ゟ申出候者、諸国之門徒一統ニ浄土真宗与相唱度段願出候付、於浄土宗相障儀無之哉之旨、御尋御座候処相障候旨申上候得者、其趣書付差出候様被仰渡候ニ付、相障候儀左之通ニ御座候

此段浄土真宗与申名者、大唐善導大師観経御疏之中ニ出候而、圓光大師最初建立之浄土宗を則浄土真宗与相称し候事ニ御座候、依之御先祖様始別而神君様御宗門ニ被為在御定置、則京都四箇本山幷関東十八檀林其末々ニ至迄一統浄土真宗ニ而御座候、然るに今般一向宗を浄土真宗与称し候時者、宗名混雑仕甚相障り申候殊に公儀御代々様御宗門ニ御座候処、浄土真宗与申宗名両宗ニ相唱候而者、御先祖様別而東照宮様御宗門ニ被為御定置候尊慮ニも相障奉恐入候

一浄土宗者、円光大師開宗以来浄土真宗ニ御座候故、圓光大師江数度之勅号被成下、殊更元禄以来大師年回御忌之毎度ニ、浄土宗本山たるにより京都知恩院江勅使

諡号被成下、勅会御法要御座候、其上後柏原院・正親町院両帝真宗惣本山之綸旨を賜リ、且黒谷金戒光明寺江者、後小松院宸翰ニ而浄土真宗最初門与申七字之勅願を被成下候事ニ御座候、依之我浄土真宗之外、他ニ而此宗名を称すへき訳決而無御座候、若一向宗を浄土真宗与改め候時者、勅命ニ相障リ申候

一御当山江賜リ候勅願所綸旨御文言に

武蔵国増上寺　勅願所須開真宗

弘通之玄門奉祈　宝祚無疆丹棘者

綸命如此仍執達如件

慶長十三年十一月十一日　左少弁花押

増上寺源誉上人御房

如此真宗弘通之旨、綸命御座候得者、浄土真宗之号ハ浄土宗之称号ニ無紛候得者、他門ゟ押而競望可仕義ニ者無御座候、若強而改号致し候時者綸言ニ相障リ申候

一神君様御当山観智国師江被下置候御条目第三箇条目ニ厳重之儀式を以、碩学衆円頓戒相承可仕旨、御定書被成下候、此儀者宗祖圓光大師三朝帝王之戒師与成、摂家・権門高貴之方江円頓戒を取授、浄土真宗之弘通有之伝ヽ相承致し来候、依之神君様・台徳院様・大猷院様ニ茂円頓戒御相承被為有、尓今六十余州浄土宗之僧徒ハ世寿拾五歳以上関東十八檀林ニ掛錫致し、御条目第五ヶ条目之通学臘十五年満ニ宗脉(脈)并円頓戒相伝、廿年満ニ布薩戒相承仕即御条目之規則無実乱、浄土真宗之行儀相守候、上件重々之訳を以宗祖圓光大師開宗以来浄土真宗与称し来候、然るに浄土真宗之号他門ニ而称し候時者、御条目之表ニ相障リ奉恐入候

一他門ゟ浄土真宗与唱候時者、宗名相混し両宗同名を称し候事古今決而無之儀奉存候、且前書ニ申上候通綸命ニ相障リ勿論東照宮様・台徳院様御条目等相障候段、重々奉恐入候、殊ニ法然上人之御伝四十八巻ハ、伏見・後伏見・後二条三帝之宸翰ニ而真宗弘通之ため、知恩院江被為納置候、此勅修御伝ニ浄土真宗之儀明にて、即勅命によりて弘通致し来諸宗一同共許之通名ニ御座候、若強而他門ニ而浄土真宗与称し候時者、真偽之諍論自讃毀他之基ひとも相成候而者、公儀御制禁ニ

も相障可申哉、其段甚奉恐入候

正月　　増上寺

役者

㈢

未十一月十九日於太田備後守殿相渡リ候御書付写

両本願寺〻被相願候浄土真宗与宗号相唱候儀、於浄土宗差障候趣、先達而松平伊賀守方江書付被差出、則右差障候旨を以両本願寺輪番江申渡奉行所ニ而者、一向宗与取扱候

未十一月

㈣

安永五年

申二月御老中〻寺社奉行江出候書

宗号之儀ニ付増上寺并両本願寺開祖以来、綸旨・震翰等其外証拠記録之趣を以追々申立双方申募候得共、不容易儀早速ニ難決殊更日光御社参程近候儀、旁此節遂評達御聴ニ候儀難相成候間、先奉行限ニ請取得与申談御世話無之様可被取計儀肝要ニ候、数百ヶ年済来候儀相改度段本願寺より申立候共、是迄致来候通可被差置旨最前被申聞候ハヽ、強而申立方も有之間敷候処、増上寺江被相尋候故被方ニ而も彼是申立、且又於奉行所者一向宗と被相改候旨被申聞候故、末共江申触候夫ニ付而者、猶又本願寺〻も申立候一端ニ相成候儀与相聞候、乍去御菩提所と申、門跡与云何れも重き本山方ニ而、右躰申募候儀双方共不穏便事ニ候得者、右之通此上得心無之願不相止時者、折合被遂吟味候上ならてハ難被及御沙汰ニ候、重き本山勝負も片付候而者、甚以いかゝ成事ニ候、此趣被相含評儀之上双方江茂、申含方も可有之事与各存候事

寺社奉行へ　　老中

㈤

二月十九日於土岐殿・土屋殿御立会ニ而被仰聞、翌廿日牧野殿ニ而増上寺役者へ被仰聞候、同様之儀口上之趣。

宗号之儀御社参前間も無之御差支ニ相成、殊宗名宗判格別之事ニ候、宗判時節差掛リ御政事ニ相障リ候間大僧正江茂内々申入、是非相済候様頼入旨無據被仰聞候、尤御老中ニ而も御沙汰有之候由也、罷帰方丈江も申聞御答可申上旨ニ而退出

(六)

二月廿五日夕方田沼主殿頭殿ゟ極内被仰越候書付

一増上寺宗名之儀ニ付、代々之方丈御懇意ニ而役者中茂、不外成被存候ニ付、不得止事内存之趣、至極内々ニ而申達候、御老中之役場ニ而者、中々乍内々も被申事無之候可被申事有之候得者、御奉行所へ差向可被申候、又別ニ内々被申候謂なきにも無之候、御側勤被致候故、御側勤之所ニ而、至極内々被申候。

一増上寺宗門之儀ニ付、同号他ニ有之候而者不相成儀、何れも追々致承知被居尤ニ候事

一当四月宗門帳印形之儀、増上寺ゟ致難渋有之旨被申候事

一増上寺ゟ御願宗号之儀与宗門帳印形事者、筋合格別ニ被存候事、

一如例年宗門帳印形被相調候而者、先達而被相触候趣も有之ニ付触返しニ相成差支候由、是者触返しニ而者無之再触ニ致可出被存候事、再触与申者たとへハ当宗門之儀、弥浄土真宗ニ無相違先達而相触候通ニ候、且又其節於他門浄土真宗与認候儀無之筈ニ候旨相触候処、此節宗門帳差支候故、先無貪着去々歳致来候帳面之通可被相用候、於公儀御宗門御政事障候儀有之間敷事ニ候間相触候、右振合ニも候ハヽ全再触之趣意ニ可相成事

一当時相済候ハヽ、甚時節能事ニ被存候事

(七)

二月廿八日於土岐美濃守殿被仰渡書付

増上寺御宗門之儀ニ付同号他ニ有之候而者不相成義尤ニ候、併当年宗判之儀者差懸リ御政事ニ相障リ候間、去年去々年之通当年之所者無滞印形可致候、宗名混雑之儀者追々吟味之上可被仰候間、方丈答書日光御社参後早々可被差出候

二月

右之通松平右京太夫殿ニ而書付を以被仰渡候

(八)

申極月廿八日増上江相渡リ候触書

諸国御料・私領宗門改帳大概寛文之頃より以来年々之帳面寺社奉行ニ而取集る筈ニ候

一御料所之分者其所々之御代官ニ而取集御勘定奉行を以可差出候

一江戸町方ハ町奉行ニ而被集可差出候

一遠国奉行有之町方ハ其所之奉行ゟ可差出候

一万石以上幷御役人交代寄合等ハ銘々ゟ可差出候

一頭支配有之面々者地頭々ニ而取集置、頭支配を以可差出候

但与力伊賀もの同心等者、給地其外小給ニ而も、知行所之人別帳者頭支配ニ而不洩様相改取集置、追而差出可申候

一寺社領之分者其寺社ニ取集置成丈其外御代官・領主・地頭を以可差出候

但前々諸役等直ニ寺社奉行江差出候分者、寺社奉行江直ニ差出候而も不苦候

右之通相心得帳面集次第一ヶ年毎之年号幷冊数箇条書ニ致し出来次第牧野越中守方江差出、追而差図次第帳面も差出可仕申候、右之趣不洩様被相触候

十二月

(九)

安永六年

酉正月五日増上寺江相渡リ候触書

諸国宗門改帳之儀、当年迄ハ諸宗一帳ニ差出候得共来年よりハ一宗限リ一冊宛ニ致し、尤宗号其外認方新規之儀不致、是迄之通相違無之様相認可差出候、右之趣、御料者御代官、私領者領主・地頭より相触、猶又御代官・領主地ニも入念可相改候、尤承合候儀も有之候ハヽ、牧野越中守江可承合候

十二月

(一〇)

戸檀林江御達之趣被致評議方丈始檀林中拙僧共一同申上候者、従両本願寺願中ニ候得者、惣而吟味事等御糺中者仕来之通いたし候様被仰付通例ニ候間、当年宗門帳之儀者、年来仕来之通浄土真宗一向宗本願寺門徒与肩書有之候而も、浄土宗之寺院無滞印形いたし候様、配下之寺院江可申達旨被仰渡候得共、此段申渡候而も、支配下之寺院承知仕間敷与奉存候訳者、去ル未十一月於太田備後守殿御書付を以被仰渡於御奉行所一向宗与御取扱被成候上者、何方ニ而も一向宗与称し可申儀ニ奉存候、此度被仰渡候御書付之通彼宗ニ而宗号不限一名称し来候ハハ、差支無之宗名を以宗判等之節、肩書仕可然儀ニ奉存候、御吟味中者仕来之通与被仰付候儀通例之御取扱与御座候得共、於当宗者御吟味中与ハ不奉存候、其訳者彼宗ゟ願出候儀も、無之御奉行所等ゟ仰渡も無御座已前ニ候ハハ、是迄之姿ニ而等閑ニ候得共、前書之通御奉行所ニ而御取扱御座候段被仰渡候上者、諸国一統御奉行所御取扱之宗号を準縄ニ可仕儀与奉存候、宗判之儀者公儀御改事ニ茂相拘リ重き儀ニ御座候得者、何宗与其宗号を相認酉正月別帳宗判御触書、末山江添書伺之上御下知之趣増上寺より被相渡

別紙御触書之趣、宗名混雑無之様願中ニ付奉伺候所、宗門改帳御吟味之支ニ而永々之儀ニ者無之旨、於寺社御奉行所被仰渡候、此段無心得違宗判可被改候　以上

正月

(二)

宗門改之節、帳面両本願寺末、専修寺・仏光寺末寺院肩書ニ只今迄、浄土真宗・一向宗・本願寺門徒与肩書有之を、浄土真宗与有之候而者、浄土宗於寺院印形相障候而者宗門改之時節に相成候ニ付、両本願寺ゟ願中ニ候得者、惣而願吟味事等糺中者仕来之通いたし候様、奉行所ゟ申付候儀者通例ニ候間、当年之儀者、願糺中之事ニ付吳論有之候而者、宗判相滞候ニ相当リ候間、当年宗門帳面之儀者年来仕来之通、両本願寺末等之寺院宗号肩書江無滞印形いたし候様、可申達旨右之通被仰渡候

此段方丈江申聞候處、宗義ニ相掛リ不容易事故、江

紛敷宗門ニ無之旨印形差出候儀ニ御座候、殊ニ公儀御代々様御宗門ニ御座候處、浄土真宗与申宗名両宗ニ相唱候時者、御先祖様始、別而東照宮様御宗門ニ被為御定置候、神慮ニも相障奉恐入候ニ付、差障無之宗名を相用ひ宗判無滞様可被仰付哉与奉存候、依之御達御座候御書付支配下江申達候儀、御奉行所ゟ被仰渡候儀を違背仕候而者無御座候得共、前書之意味合故申渡仕兼候、尤宗判相滞候に当リ候旨被仰渡候段者奉恐入候得共、於彼宗門者宗号不限一名若御奉行所願中ニ候ハハ、御糺相済候迄御奉行所御取扱之宗号相認候様被仰付候得者、宗判滞候ニ相当リ申間敷哉与奉存候、此段御賢察之程幾重ニも奉願候以上

増上寺　役者

二月

(二)

覚

宗判之儀ニ付増上寺役者江以書付被仰渡候趣、檀林一同可致評議旨増上寺方丈被申付江戸檀林増上寺江罷出致評議、則増上寺役者ゟ評議決抉之趣、書付差出右一件者最初従彼宗浄土真宗与宗号相唱度旨願出候節、十八檀一統会談之上右浄土真宗与相唱度旨者、於当宗差障候趣御奉行所申上候儀御座候得者、宗判之砌浄土宗ニ混雑之宗名有之候而者、右相差障候趣と離候儀ニ而者無之、依之増上寺役者ゟ差出候書付之通御聞届被成下今年より於他門宗判之砌肩書ニ此方宗名浄土真宗与不相認候之様、以御威光被仰付被下度檀林一同奉願候以上

二月　檀林惣代

小石川　傳通院
浅草　幡随院
本所　霊山寺
深川　霊巌寺

(三)

奉願口上書

先達而從両本願寺願出候宗号之儀ニ付、別紙書付を以奉願候此段宜御聞済被成下候様奉願候　以上

知恩院役者

大光寺印

申

二月

(四)

覚

去午年両本願寺ゟ諸国之門徒一統に浄土真宗与相唱度段願出候ニ付、増上寺役者を被召出於当宗門相障儀無之哉之旨、御尋御座候、依之其趣増上寺ゟも当山江申来候ゆへ彼門徒ニ而浄土真宗与相唱候得者、甚以当宗ニ相障義重々相記し増上寺表江差遣候、旦又関東檀林會談之上相障候旨増上寺ニおゐて相調去未正月十七日役者ゟ書付を以申上候処、同年十一月十九日両本願寺輪番江浄土真宗与宗号相唱候儀、於浄土宗差障候趣を以被仰渡御奉行所ニ而者一向宗与被成御取扱候段被仰渡之趣、増上寺役者江御書付を以被仰渡此段諸国門末江茂相達一宗之僧侶難有存候、然ニ当正月廿六日増上寺役者被召出宗門改之節、帳面両本願寺末・専修寺・仏光寺末寺院肩書ニ只今迄浄土真宗一向宗本願寺門徒与肩書有之を浄土真宗与肩書有之候而者、浄土宗於寺院印形相障候而者宗門改之時節ニ相成候ニ付、両本願寺ゟ願中ニ候得者、惣而願吟味事等糺中者仕来之通致し候様奉行所ゟ申付儀者通例ニ候間、当年之儀者願糺中之事ニ付吳論有之候而者宗判相滞候ニ相当リ候間、当年宗門帳之儀者年来仕来之通、両本願寺末等之寺院宗号肩書江無滞印形致し候様可申達旨右之通被仰渡候由、此儀ニ付増上寺役者等より願上候趣も申来一宗ニ相拘リ甚以奉恐入候事ニ御座候、当年之宗判ニ不相改彼宗より浄土真宗与書出候ニ当宗より不相構宗判仕候而者、先達而御裁断相済被仰渡候ニ相障と申儀も、乍恐不相立様ニ相成一宗之者共甚倒惑仕候事ニ御坐候彼宗ニ而浄土真宗与申候而者当宗ニ相障候故、公儀被仰渡を相守、宗判不仕事ニ御座候、彼宗ニ者公儀被仰出候一向宗与御取扱を不相用、自分ニ而浄土真宗与書出候所、宗判等相滞儀与奉存候、然者乍恐今年ゟ一向宗与計相認、浄土真宗与不相認、宗判之節滞無之様被仰渡被下候様偏ニ奉願候、早竟(畢)浄土真宗与申者、先達而増上寺役

者ゟ差上候書付之通、法義者勿論当山江被成下候勅書御判物等御文言其外、多端相障節顕然之御事ニ御座候、尚又当二月増上寺役者より宗判之儀ニ付、委細書付を以奉願候趣、且檀林中より御願申上候通宜御聞済被成下、先達而被仰渡候通、唯一向宗与御取扱彼門徒ゟ浄土真宗与不相認候様、御威光を以被仰付被下候様一宗之門末末〻之寺院迄一同偏奉願候　以上

知恩院

二月　　役者

㈤

二月十九日廿日増上寺役者へ寺社両所ニ而被仰聞返答口上

宗判之儀ニ付役者江被仰聞候趣、委細愚老江申聞候、然ニ宗名法義宗判共に御政事を不相離義御座候得共、右法義宗判一躰之儀、宗義之意味合申上度候得共、此節日光御社参前御繁多之御時節中与申、殊更於愚老も別行ニ而御祈願申上罷在候得者、右重〻之意味合并配下ゟも、難渋申出候を乍存、此節彼是申上候義奉恐入候、然上者御社参被為済候迄、御答之儀御延引被下度奉願候此義者御政事ニ拘リ候義ニ御座候得者、此方ゟ難申上御座候得者、宜御賢察願入存候

㈥

口上覚

一當山知恩院者、圓光大師開宗凡六百有余年浄土真宗之法門無断絶弘通いたし候、浄土根本不易之地御座候、依之浄土一宗之惣本山之勅書被成下、殊右之趣故東照宮様厚神慮を以万事結構被為御定置、御威光を以浄土真宗之法門相続致弘通来候事御座候、然處他門ニ而浄土真宗与称し候時者、当浄土宗之法義ニ相障儀数多有之事ニ御座候、其上御当家御先祖様以来御宗門浄土真宗ニ而御座候得者、他門ニおゐて当御宗門ニ対し浄土真宗与称し候事者、可恐入事ニ御座候、依之他門ニ而浄土真宗与不称候様御威光を以被仰付下候様奉願候　以上

二月　　知恩院前大僧正

右五月十二日差出

㊐

口上覚

一宗号浄土真宗者、具略之(異)呉ニ而浄土真宗与称候者、即浄土宗之號ニ御座候段者、前来従増上寺ゟ申上候通ニ御座候、然ニ当山者、元祖圓光大師開宗以後六百有余年来、嫡流相承仕浄土真宗之法式相守候、依之圓光大師嫡伝三国仏祖相承之圓頓戒を以、世々帝王奉始尊貴之御方江御附法仕且無量寿宝号日課称名御授与申上候、数代之住持戒師相勧、国家安全御祈願無退転真宗弘通仕来候

一當山開祖圓光大師者、三帝之戒師摂家親王等江、円頓戒奉御授与候、五世慈空大僧正者、亀山帝之戒師、六世如一国師者、伏見院・後伏見院・後二条院右三帝之戒師、八世普寂国師者花園帝江無量寿宝号日課奉御授与候、其後依勅請於紫宸殿、一七日を限無量寿宝號百万偏(ママ)を以、天下安全之御祈禱申上依叡感後代浄土真宗之亀鑑として、祈禱百万偏与申、勅額幷菊桐重紋等被下置、二十一世聖然国師者後花園院・後土御門院右両帝之戒師、殊ニ浄土真宗嫡流第一座之綸旨等被成下候、二十五世傳誉上人者、御柏原院依勅請大永二年九月廿二日ゟ廿八日迄一七日之内、於禁中大原問答を講談仕浄土真宗之勧誡申上、此節三条西殿ゟ被遣候御書略如左御座候

七日法談無一事之障导珍重、叡願成就尤聖主此度勅喚之儀、当于時御眉目真宗之光華、可為末代之美談候云々、猶以面謁可申述候、定窮申候　恐々敬白

九月廿九日　　前内府　堯空

知恩寺方丈

右書面ニ真宗之光華与有之候者吾浄土真宗称華之儀明ニ御座候、傳誉上人者後柏原院・後奈良院右両帝之戒師、其外大臣・公卿・親王家等江円頓戒を御相承及無量寿宝號日課御授与申上候、依之宸筆知恩寺額及方丈之称号勅額等迄被下置候、已ニ知恩寺者依為浄土真宗嫡流本山則元祖大師御忌無退轉可相勤旨、依勅御制鳳詔御諷誦を拝領仕候、右宸筆御諷誦ニ茂浄土真宗之儀

明白ニ有之候、別而勅講大原問答之中ニ者、吾圓光大師之語ニ浄土真宗者実教也、是故に真宗となつくと御座候、其外吾祖師之書籍ニ浄土真宗与申文証多端御座候得共繁を恐て不申上候

一当山をゐて浄土真宗規則相守天下安全御祈願申上候儀者、前書之通ニ御座候、依之当山三十九世光誉上人者厳有院様御治世依上意寛文五年八月参向仕候処、為永世御祈禱料黄金五百枚拝領御祈禱無退轉申上来候、惣而吾圓光大師之正統を相守、且円頓戒相承仕御祈願申上候者、皆悉浄土真宗ニ而御座候段者、従来増上寺ゟ申上候通ニ御座候、殊ニ御先祖様奉始別而神君様御宗門ニ被為御定置候段乍恐厚神慮之儀与奉存候、然処於他門御宗門同號相唱候而者、法義混雑之段甚難渋至極仕候、其上門末寺院追々申出候得者、自然与真偽之相論ニも相成候儀、別而御制禁ニ相障可申哉与奉恐入候、上件重々之訳ニ御座候間惣而宗門改等之節、於他門御宗門同號不相認候様　以御威光被仰付被下度奉願候、右願之通被仰付候得者、東照宮様被為神慮叶、且御先祖様奉始御代々様別而　惇信院様御菩提ニ茂可被為成儀奉存候、此段猶又厚御賢察奉頼候　以上

申
三月　　知恩寺

(六)

口上覚

浄土真宗与者、則浄土宗之称号ニ御座候、当寺者宗祖圓光大師叡山黒谷之霊宝悉く被移候地にして、浄土真宗最初弘通之處ニ御座候、開宗以来凡六百有余年浄土真宗之法燈致相続来候、其上御当家様御威光を以、四箇本山随一として浄土真宗之御門断絶なく弘通仕候、当宗者公儀御代々様御宗門之儀ニ御座候得者、他ニ同号有之候而者甚指障候儀与奉恐入候、宗判之節、他門において同號不相認候様、御威光を以仰付被下候様、門末一同奉願候　以上

三月　　金戒光明寺

(元)

口上書を以奉願候覚

一宗判之儀ニ付先達而御書付を以増上寺江被仰渡候趣承知仕候、然ニ浄土宗門之儀者元祖圓光大師興隆之浄土宗全く浄土真宗唯具略之吳名元来同号ニ而格別之宗名ニ而者無御座候、別而御先祖様・東照宮様被為御定置候御宗門之宗名他門にて混称仕候段甚恐入候、殊ニ当山開宗圓光大師者三朝之戒師同十七世仏立恵照国師者真宗之正統顕然たるの旨を以、後円融院・後小松院・称光院三帝に円頓戒を奉授与、依之正長二年賜国師之号候、猶其外天正年中一向宗本願寺顕如光佐大坂玉造ニ籠城在之候節、亜相信長公数ヶ年之間被攻候、然ニ当山者圓光大師正統浄土真宗之法式相守候、禁庭之御内道場たるによりて別而蒙勅御祈願申上候処、右本願寺顕如大軍与共速ニ退城有之候、時に勅願御成就為御褒美菊桐金御紋拝領仕候、右等之儀全く浄土真宗弘通之故ニ御座候、然に浄土真宗之号他門ニ称し度由申候とも此等之厳重成儀決而無之候得共虚名与申者ニ御座候上、真宗之正統を却而偽リ与仕候ニ可相成也与奉恐入候、勿論宗名宗判共ニ不相離之上者御宗門之外他門におゐて浄土真宗与称用不仕候様、以御威光被為仰付被下度門末一同御賢慮奉願上候　以上

申五月　　京都　浄花院

寺社御奉行所

(三)

増上寺方丈答書五月廿五日ニ差出

御宗門之宗名者、元祖圓光大師開宗以来師資印證之法義浄土真宗たるの旨、曽而無其吳論浄土即真宗、真宗即浄土門之儀、一名具畧之吳にて、各別之宗名にてハ無之、尤真宗之法義者三国伝来相承にて浄土真宗者全く浄土宗之事ニ候得者、真之字之有無を以、宗旨差別与申儀者無御座候、宗名混雑法義混雑之訳有之候、名之混雑とは、御宗門之宗号を他にて称し候時者、一名両宗之過失、此義古今諸宗におゐて曽而其例無御座、自然与諍論之一端与奉恐入候、法義混雑之儀者　勅修御伝に具に載られ候、強而申立候得者、宗論ニ類し御制禁相障リ申候、且宗判之儀者重き御政事ニ御座候処

宗名ニ同号有之候而者彼此之所立難相分候間、向後諸国一統他ニ而同号相用ひ宗名混雑無之様、被仰付被下度幾重ニも宜御沙汰頼入存候　以上

五月

(三)

方丈之答書ニ同日相添差出役者訳書

先達而宗判之儀ニ付御奉行所ゟ御達御座候者、宗名宗判各別之事ニ候間、宗判之儀者是迄仕来之通可致印形与之御儀、則方丈江申聞候処右返答被申上候者、宗名法義宗判共御政事を不相離儀ニ御座候得者、右法義宗判一体之儀故、宗義之意味合被申上度候処其節者、御社参前殊ニ御祈願中故、御社参後迄答之儀、御差延被下度被申上候処、二月廿八日御書付を以御宗門之儀ニ付、同号他ニ有之候而者不相成儀尤ニ候、乍然当年宗判之儀者差懸リ御政事ニ相障候間、去年去々年之通当年之所者可致印形候、宗名混雑之儀者追而御吟味之上可被仰出候間、方丈答書御社参後早々可差出旨被仰渡候に付、此段御請被申上候、右方丈被差出候ニ付、猶又拙僧共ゟ委細之訳申上候趣左之通御座候

一圓光大師浄土宗開創之儀者、大唐善導大師ゟ相承之宗号ニ而略而者浄土宗与称し具ニ者浄土真宗与申候、此儀両大師制作之章疏之中に歴然と有之候、此具略之中に呼易く聞へ易きに隨ひ真之字を略して浄土宗と称し候事ニ御座候、但何れ之宗ニも具略有之事其例数多御座候其一を申上候者、真言宗略ニ而具ニ者真言陀羅尼宗与称し候、是を、具略之違と申候、然ニ若誤りて浄土宗与浄土真宗与別号之様ニ心得候者、道理を弁へさる事ニ御座候、其上真者偽之返対ニ候、他門ニおゐて浄土真宗与称し候時者、当宗者自然与偽宗之様ニ相聞左候得者、議論ヶ間敷相成御制禁之自讃毀他ニ相当リ殊御先祖様別而東照宮様御子孫御累世御宗門被為御定置候得者、同号他ニ有之候而者差障リ奉恐入候、此段厚御賢察可被成下候

一当宗門圓光大師開宗根本たるにより、京都知恩院江浄土宗惣本山之勅書を賜リ、大師御遠忌之毎度、勅使を以諡号被成下、加之百世之于今至迄恭奉敕詔大師之御忌於知恩院致執行、且黒谷金戒光明寺江者後小松院宸

翰ニ而浄土真宗最初門と申勅額を被成下候、此等之儀当宗則浄土宗たる故に御座候、依之後土御門院之御宇明応四卯年四月廿一日鎌倉光明寺江勅書、後陽成院御宇慶長十一年九月七日三州大樹寺江賜リ候勅書同御宇慶長十三年十一月十一日御当山江賜リ候勅書御文言并皆開真宗弘通之玄門と宣命被成下候、是全く圓光大師興隆浄土真宗之法を弘通いたし候徳功ニ御座候、尤浄土宗江賜リ候綸旨ニ真宗与有之候得共、浄土真宗之号者則浄土宗之称号たる事勿論之儀ニ御座候、依之他ニ同号無之様偏に奉願候

一前件之通、浄土真宗与者圓光大師本朝最初興隆之宗号ニ而、大師在世之時者三帝之戒師与被為成、其外月卿雲客并諸宗之碩徳各戒師与仰れ、円頓戒及念仏法門弘通有之候を浄土真宗与申候、然者真宗伝来之戒法随分に護持いたし候人、弘通すへき宗門ニ御座候ニ付、鎌倉光明寺開山記主禅師・知恩院如一国師・知恩寺聖然国師・清浄花院恵照国師等茂、天子御授戒之師与被為成候、東照宮様・台徳院様ニ者御当山観智国師、大猷院様ニ者御当山照誉了学上人を戒師与被為成、円頓戒并浄土真宗之奥旨、念仏之法門を御傳受被為在、干今浄土宗之僧徒者神君様御条目之通十八檀林に掛錫いたし、師資法縁相承を以真宗を弘通いたし、且善導・圓光両大師之厳誡に随ひ、自門修行之法義者、三部妙典を讀誦し六時礼讃を諷詠し厭離穢土欣求浄土之竟地を定、三心四修欠る事なく日課称名懈怠不致候様ニ相勧候事ニ御座候、殊更奉祝禱今上皇帝福基永固聖花無窮、大樹尊君武運延久天下太平国家安全之事、浄土真宗之法義ニ而御座候、扨又宗名法義宗判ともニ御政事を不相離儀ニ御座候与申上候者、宗判之儀ハ諸国一統紛敷無之様、宗〻各別之宗名を以御改有之候事ニ御座候得者、乍恐御政事を不相離重き御事与奉存候、依之法義宗判一躰与申上候事ニ御座候、然ニ同号両宗ニ相称候時者宗名混雑仕、殊ニ御当家代〻様御宗門ニ被為御定置候御儀候得者、他ニ同号有之候而者甚奉恐入候間、偏に御威光を以、宗判之節他門ニ而同号不相認候様被為仰付被下度、一宗之面〻一同奉願候　以上

五月　　増上寺

廿五日ニ差出　　役者

㊂

以書付奉願候覚

一宗名之儀ニ付去午年於松平伊賀守殿増上寺役者江御尋ニ付、於浄土宗差障候趣御答申上候段承知仕候、且浄土真宗之儀者則御宗門浄土宗之宗号ニ而其法義三国佛祖伝来ニして、当宗門之外ニ浄土真宗与可称訳決而無之儀ニ御座候、尤浄土宗・浄土真宗者唯具畧之異而已ニして全く同様ニ而御座候、依之宗判等之節茂他門之寺院肩書ニ浄土真宗与認有之候而者混雑仕候儀ニ御座候、勿論諸宗共ニ宗義之意味別々成を以宗名も又別々ニ相分候儀ニ御座候得者、同号を可称謂れ無御座候、若他門ニ而浄土真宗之称号有之候而者、慶長十一年九月七日当寺江被下置候勅命ニ相障リ殊ニ當寺之儀者、御先祖様より御宗門之御菩提所別而永禄年中神君様於大樹寺当寺十三代登誉天宝を戒師として、浄土真宗之五重宗脈布薩戒被為成、依之御子孫累世御宗門御定被為置候宗名混雑仕候而者、神慮ニも相障可申奉恐入候、依之向後於他門ニ紛敷宗名称用不仕候様、御威光を以被為仰付被下置候様幾重ニも奉願上候　以上

五月　　三州　大樹寺

寺社御奉行所

㊃

以書付奉願候

去未年宗号之儀増上寺幷十八檀林會評之上、書付を以申上候通浄土真宗与申者御宗門之宗号ニ而御座候処、若於他門妄ニ相用候儀出来候而者甚以奉恐入候、其上種々相障儀御座候間、他門ニ而御宗号妄ニ相用不申候様被成下度当院幷配下之寺院一同奉願候　以上

安永五申年五日　　駿州　宝蔵院

御奉行所

㊄

以書付奉願候

一宗名之儀ニ付去午年於松平伊賀守殿増上寺役者江御尋御座候ニ付、則当宗ニ相障候趣申上候段承知仕候、然ニ浄土真宗与者即浄土宗之宗名ニ而、御先祖様奉始別

而、東照宮様永世御宗門ニ被為御定置候御由緒之浄土宗ニ而御座候、且当寺之儀者大樹寺殿道幹大居士為御菩提所、天文年中神君様御手自松一樹被為植御当家御繁栄たるにおゐてハ、枝葉其方より向ひ候様ニと御祈念被成置、則浄土真宗之一宇御建立被為遊候而、右松当時大木ニ而相栄罷在候、御累世御菩提所之御宗門ニ御座候處、於他門ニ同号相唱候而者宗名混雑仕御宗門ニ相障神慮之程奉恐入候、依之向後於他門同称不相用候様、御威光を以被仰付被下候様幾重ニも奉願候　以上。

五月

三州　松應寺

㊁

書付を以奉願候

去未年宗号之儀就御尋増上寺并十八檀林會談之上書付を以申上候通、浄土真宗与者即御宗門之宗号ニ御座候、然処当院之儀者三州御先祖・親氏様・恭親様為御菩提所御建立被為成置候、則神君様永世御宗門ニ御定被為置候儀ニ御座候得者、同号他門ニ有之候而者、尊慮ニも相障可申与奉恐入候、依之宗判等之節宗名混雑不仕候様御威光を以被為仰付候様、偏ニ奉願上候　以上

五月

三州　高月院

㊂

以書付奉願候

一去午年両本願寺ゟ諸国之門徒一向宗、或ハ門徒宗与相称し候處、向後浄土真宗与相唱度願出候ニ付、浄土宗おゐて差障儀無之哉之旨、於松平伊賀守殿増上寺役者江御尋ニ付、於浄土宗差障趣書付を以御答申上候ニ付、右差障候趣於奉行所者、一向宗与御取扱御座候旨増上寺役者江御達之趣承知仕候、右浄土真宗之儀者浄土宗之宗名ニして、三国佛祖伝来ニ而、於他門浄土真宗与称候訳決而無御座候、尤浄土宗浄土真宗具略之異而已にして、全く同様にて別儀ニ而者無御座候、依之宗判等之節、他門之寺院肩書ニ浄土真宗与認有之候而

者、混雑仕候儀ニ御座候、勿論諸宗共ニ宗儀之安心別々成を以宗名も相分れ、差別之為之宗判ニ御座候得者、同号を可称謂れ決而無御座候、勿論他門ニ浄土宗之称号有之候而者、所々之勅書或者勅願等に相障、別而神君様御宗門ニ御定被為置候神慮ニ茂相障可申与奉恐入候、何卒向後於他門紛敷宗名決而不称様、御威光を以被仰付被下置候様、宗門之僧徒一同奉願候　以上

五月　京都　円福寺

(七)

以書付奉願候

浄土真宗之儀、去午年松平伊賀守殿江両本願寺ゟ願出候ニ付、於浄土宗差障儀無之哉之旨、増上寺役者へ御尋ニ付、差障候趣御答申上候段承知仕候、右浄土真宗与者、即御宗門浄土宗之宗名ニ而、浄土真宗者浄土門之儀、所謂其法義者三国伝来相承ニして、当宗門之外浄土真宗与可称訳決而無之儀ニ御座候、且当山之儀者、開基以来浄土真宗之法義を弘通仕、御先祖廣忠様於岡崎之御城御他界被遊候節、時之住持照翁を被為召、御新葬(ママ)・御法要於当寺御修行被仰付候ニ付、則浄土真宗之法則を以奉執行候、其以来御代々様御菩提、且御武運長久之御祈禱も浄土真宗之法則を以奉御祈願候儀ニ御座候、然処於他門浄土真宗之同号有之候而者、自然与真偽諍論之一端とも相成、御制禁相障可申与奉恐入候間、向後諸国一統宗判等之節、御宗門之浄土真宗之号不称用様、御威光を以被仰付被下置候様奉願候　以上

六月　三州　大林寺

(八)

以書付奉願候

去午年京都両本願寺ゟ諸国之門徒一統浄土真宗与称し度旨願出、於浄土宗差障候儀無之哉之旨、於松平伊賀守殿増上寺役者江御尋ニ付、差障候趣書付差上候段承知仕候、然処浄土真宗与申宗名者則御、宗門之浄土宗之宗名ニして、浄土とは国土に約し、真宗とは能修之法義、即三国伝来佛祖相承之法門ニ而、浄土真宗全浄土宗之儀ニ

而御座候、依之流祖西山上人之時ニも浄土真宗之要義者、善導大師十六観之精要を授ると、後青龍院一品親王尊道公御染筆被成置候、且当山末当国長津洞泉寺ハ信光様御末、長津之城主上野守政忠公之建立ニ而、則供鐘之銘曰

月愛山洞泉寺者　当津之城主松平上野守政忠建立
浄土真宗之精舎也

右之趣御座候得者、於他門決而浄土真宗与可称訳無之儀ニ御座候、殊当山之儀者、御先祖信光様御嫡男親則公并信光様御簾中被為入、右為御菩提御建立被為仰付御菩提所与被為成置候、依之浄土真宗之法義を以、御代〻様曰〻御供養奉申上候、其上神君様永世御宗門御定被為置候浄土真宗、他ニ同号有之候而者、尊慮之程奉恐入候間、向後於他門浄土真宗之称号不相用候様、御威光を以被為仰付被下置候様、宗門之僧徒一同奉願候　以上

六月

三州
妙心寺

㊀

口上覚

宗号之儀ニ付、京都両本願寺ゟ浄土真宗与相唱度旨御願申上候処、去午年増上寺役者江御尋ニ付、於他門浄土真宗与申同号有之候而者、於浄土宗指障候趣御答申上候段承知仕候、浄土真宗与者浄土宗之具名に御座候得者、他門浄土真宗与申称号決而無之、真宗与申者佛祖三国直伝之宗与申事ニ御座候、依之後青龍院一品親王御染筆之西山善恵上人之伝文ニ、圓頓菩薩之大戒者智者大師十七代之血脈を伝へ、浄土真宗之要義者善導和尚十六観之精要を授けると御座候、此義先達而増上寺役者ゟ申上候、大唐善導大師観無量寿経疏に、真宗叵遇浄土之要難逢と申文ニ全同意ニて、浄土宗与申事を具ニ浄土真宗与御染筆在之候、又西山上人之論義鈔ニ浄土真宗之意与相認メ在之候得者、六百有余年具略之異ニ而御座候事明白ニ御座候、然ニ当山者清和天皇御開基之勅願所、且又頼朝公源家之御氏寺与御定、中興圓光大師以来宗脈相承・圓頓戒相伝無断絶弘通仕候得者、正親町院檀林学席之綸旨被下置候、右等之趣を以神君様諸法度之御条目被為下置、

西山檀林惣本山ニ而御座候故、浄土真宗之法則を以て、宝祚延長御武運長久之御祈願申上候、且御代々様尊牌奉安置御供養奉申上候、殊御先祖様已来御宗門ニ被為御定置候得者、於他門同号相唱候時者宗名混雑仕、自然与真偽諍論之基ひ、別而御制禁ニ相障可申哉与奉恐入候、上件之訳ニ御座候間、惣而宗門御改等之節、於他門御宗門之同号不相唱候様、以御威光被仰付被下候様、同末一同奉願候　以上

申　七月　　禅林寺

㊂

口上覚

宗号之儀ニ付、京都両本願寺ゟ浄土真宗与相唱度旨御願申上候処、増上寺役者江御尋御座候ニ付、他門ニ浄土真宗与申同号有之候而者、於浄土宗差障候趣御答申上候段承知仕候、浄土真宗与者、浄土宗之宗名ニ而、源大唐善導大師観無量寿経御疏ニ出候而、本朝我圓光大師相承なりて、開宗已来浄土宗即浄土真宗ニ而御座候旨、圓光大師之大原問答ニ祥ニ相見候、依之西山善恵上人伝記に、圓頓菩薩之大戒者、智者大師十七代之血脈を伝へ、浄土真宗之要義者、善導大師十六観之精要を授られけると御座候、是則善導大師之法義、浄土真宗を圓光大師より西山上人江授けらるゝと申義ニ御座候、右具ニ後青龍院一品親王御染筆之本傳ニ出申候、然るに当山者、大師遺身荼毘之明光等之奇瑞有之候段、勅修御伝ニ相見候、則舎利を収め遺廟を立、西山檀林惣本山ニ御座候、右放光之瑞遠達天聴四条院勅額を光明寺与賜り候より、光明寺と改称仕候、其趣正親町院永禄年中、法然上人遺廟浄土根元之地与申綸旨を賜り候、此等之趣神君様被為聞召、諸法度之御条目被下置候、圓光大師以来圓頓戒相承・宗脈相伝無断絶弘通仕来、殊ニ依為勅願所、浄土真宗之法則を以奉祈宝祚延長、御武運長久御祈願申上、且御代々様尊牌奉安置、御追福奉申上候、前来申上候通浄土真宗与者、浄土宗之具名ニ御座候得者、於他門可称訳決而無御座候段、増上寺役者ゟ申上候通ニ御座候、殊御先祖様奉始、御宗門ニ被為御定置候宗号、於他門相唱候時者、自然与真偽諍論之一端与奉恐入候間、惣而宗門改等之

節、於他門御宗門之同号不相唱候様、以御威光被仰付被下置候様、門末一同奉願上候　以上

申　七月

粟生
光明寺

㊂

口上之覚

宗號之儀ニ付、京都両本願寺〻浄土真宗与相唱度旨御願申上候処、去ル午年増上寺役者江御尋ニ付、他門ニ浄土真宗与申同号有之候而者、於浄土宗差障候趣御答申上候段承知仕候、浄土宗浄土真宗之両名者具略之吴ニ御座候得者、全浄土宗之宗号ニ御座候旨、増上寺役者〻毎々申上候通ニ御座候、当山開山恵隠法師之徳行遠達綸命帝之天聴奉紹、於禁中無量寿経を講読有之候処、天下和順日月清明等之八句鎮護国家之仏説与叡感不浅御崇敬之段日本記ニ出申候、是則宮講之最初ニ御座候、其後天智天皇御建立開山恵隠与御定、其時者南都ニ御座候処、右之由緒を以桓武帝遷都之時最初ニ被為移勅願所与被為成、其後圓光大師以来圓頓戒相伝宗脈相承仕、真宗之法義無断絶弘通仕来候、最初御建立之訳を以歴世之天子御崇敬、後小松院勅願所之賜綸旨、東照宮様宗派之御条目被成下、御代々様朱印頂戴仕宗門随一之本寺ニ御座候、右申上候通開山己来浄土宗之法義を以達天聴、圓光大師中興ニ御座候得者、萬代浄土真宗之法則を以武運長久御祈願申上、且御代々様尊牌奉安置御供養申上候、前来申上候通浄土真宗与者、浄土宗之宗号之儀、祖師之著述明白ニ御座候間、惣而宗門御改等之節、御宗門之同号於他門不相唱候様、以御威光被仰付被下置候様門末一同奉願上候　以上

申　七月

京
誓願寺

㊃

書付を以奉伺候

御宗名之儀ニ付、去未十一月中於御奉行所御達両本願寺〻被相願候浄土真宗与宗号相唱度儀者、於浄土宗差障候趣を以奉行所ニ而者、一向宗与取扱候有之儀ニ付、知恩院御門主始本山方諸檀林并末々寺院右一件相済候事ニ

存宗判之節種々申出候得共、当二月松平右京太夫殿御書付を以増上寺御宗門之儀ニ付、同号他ニ有之候而者、不相成儀尤ニ候、乍然当年宗判之儀者差懸リ御政事ニ相障リ候間、去年去々年之通リ当年之處者、無滞印形可致旨被仰渡候ニ付、愚老引請前條之御書付之趣を以理合申聞為致納得、当年之処宗判為仕向、御社参後宗名混雑之意味合申上置候、然処当年余日無之只今ニ御沙汰無御座、依之配下寺院ゟ来年宗判之儀日々伺出候、来春ニ至リ候得者、早々宗判御改之時節ニ相成候間、乍恐東照宮様奉始御代々様御宗門之同号、宗判之節於他門堅不相認候様、御威光を以被仰出被下度奉願候、此段御披露所希御座候　以上

十二月　　増上寺大僧正

(三)

乍恐口上書を以奉伺候

宗判之儀ニ付、他ニ同号有之候而者、末々寺院迄茂宗判難仕段、当春中強而申出候得共、松平右京太夫殿被仰渡候御書付増上寺御宗門之儀ニ付、同号他ニ有之候而者不相成義尤ニ候、乍然当年宗判之儀者差掛リ御政事相障候間、去年去々年之通当年之所者無滞可致印形との御儀ニ付、増上寺ゟ達而被申含候ニ付、今年之所者去年去々年之通諸寺院一統致宗判候、然るに来春ニ相成候得者、又々宗判に差向、其節ニ至リ宗名混雑有之候而者、諸寺院一統宗判難仕追々申出候、左候而者御政事ニ相障リ奉恐入候間、何卒御威光を以当春右京太夫殿被仰渡候御書付之趣を以、御宗門之宗号他ニ無之様当年中ニ仰出被成下候様奉願候　以上

十二月

檀林惣代小石川　傳通寺
浅草　幡随院
本所　霊山寺
深川　霊巌寺

(四)

乍恐書付を以奉伺候

先達而奉願候宗名御宗門ニ混雑之儀、且亦法義ニ相障

候趣多端御座候儀者、先達而申上候通御座候、然ニ当春門末之者共江宗判之儀、今年之所者去年去々年之通ニ印形可仕旨、当二月増上寺江被仰渡候御書付之趣を以申付、各納得仕相済申候、然処最早年内余日無御座、来春宗判御改も程近罷成候ニ付、門末之者共追々伺罷出迷惑仕候、来春宗判御改前ニ罷成、万一差支儀も御座候而者奉恐入候、何卒御威光を以願之通宗名混雑不仕候様、速ニ被為仰付被下候様偏奉願候　以上

知恩院

十二月　　役者

(三)

十一月廿七日　田沼江増上寺方丈ゟ内々返答

山内密御懇意之御儀千万忝奉存候、然處当春右京太夫殿より御書付を以、被仰渡候趣逐一奉承知、御社参前且宗判之時節に差掛リ候御儀、殊御聞請茂難有儀共ニ付、知恩院御門主始京都四箇山・諸檀林其外諸国寺院一統種々難渋申出候得共、右京太夫殿御書付之表、当年之所者宗判無滞可致印形旨被仰渡候ニ付、愚老一身ニ引請理合申聞取鎮置申候、尤其節御内密被仰下候故、別段使僧霊傳を以右之段申上置候、然處今般御内慮之趣宗名之儀、此節者双方共に意気相立候得者、勝負相片付候而者、不穏候ニ付、追而上意を以被仰出儀も可有之、夫迄者双方之願書等御奉行所江被預置、宗判之儀者是迄之通有形に被仰出候はゝ、御請可申上儀与御内尋ニ御座候、此段一宗之面々納得不仕儀ニ存候、依之愚老而已如何様に存候而も、一宗之僧徒承知不仕候得者、仮令御請申上候とも無其詮儀に奉存候、右不承知之処乍存唯一分之御請申上候事却而奉恐入候、右一件願差出候者、知恩院御門主・京都四ヶ山・諸檀林等ニ御座候得者、一宗ニ相懸リ候得者、不容易儀故倒惑之到可申上様茂無御座候得共、御内尋之儀ニ御座候故、心庭(ママ)無復蔵申上候、知恩院御門主始奉願諸寺院之面々、右京太夫殿御書付之趣を以、御沙汰無御座候時者、覚語(ママ)相極候趣ニ候得者、一身之上ニ而御厚志旁相感し御請申候共、一宗挙て不納得之時者忽虚言ニ相成恐慮不少候、宗名之儀者大切之儀ニ而、今日人我を離れ正道之理合を申候に、宗号を乱し候時者、一

宗之要領を失ひ、修行之違ハ勿論法義立破相潰レ、第一御宗門江之恐自然と一宗之滅亡ニ相成候、不肖之愚老に候得共、過分之官禄頂戴仕、御宗門之相続被仰付罷在候得者、御宗門之瑕瑾一宗之衰廃に相成候儀者、乍恐東照宮様奉始、御代々尊霊様者不及申上、猶今日御上江奉対候而も御請難申上儀ニ奉存候得共、前件厚御内慮被仰下候ニ付、尚又内存申上候、御宗門之宗号他に同号有之候得者、宗名混雑仕候ニ付、宗判之儀是迄之通有形に被仰出右御請申上候得者、一宗相治リ不申御請不申候得者、上意に相背奉恐入候、然共押而被仰出与御座候得者、無是非一身覚語仕(ママ)外無御座候、左候而者御菩提所職分之難渋奉対尊霊様方恐入奉存候、然ニ彼宗諸国一統浄土真宗と称し度段、改而奉願候事、元来彼宗之称号ニ而無之儀を相紛候儀に御座候得者、宗名混雑之儀全宗判ゟ起リ候ニ付、宗判之取扱専要に奉存候、於彼宗者古来ゟ称来候宗名種々御座候得者、追而上意之趣仰出も御座候様御内慮ニ思召候ハハ、夫迄差支無之宗号称し候様被仰出候ハハ、於当宗も追而御沙汰御座候迄者、真宗之号称用仕間敷候、右之趣宜御勘弁所希御座候　以上

十一月

(六)

御届申上候口上書

宗名之儀ニ付、両寺在府仕居申候処、永養寺儀旧冬以来病気ニ罷在、別而不相勝、依之帰京仕度申候ニ付、差登セ申候間、此段御届申上候　以上

正月廿八日　　知恩院役者　大光寺

(七)

縁山大僧正ゟ覚了院僧正江被遣候御書

一翰致啓上候　宮御方益御機嫌克被成御座珍重之御儀奉存候、然者宗號之儀彼是致混雑候段、御門主御方達御聴御願被仰立候旨致承知、於愚老法慶之至不過之奉存候、実ニ邪正辨別此期極法末澆季之所痛心此叟候、幾重ニも御門主御方御余光所仰御座候、是等之趣早速御演達頼入存候　恐惶謹言

二月十七日　　増上寺大僧上　　増上寺役者

覚了院僧正　　書判　　四判

㊀

増上寺役者〻御殿坊官家司江之書状

一簡致啓上候、然者先達而頼申達候宗名一件、其後彼是取もつれ候之段、御門主様達御聞宗義ニ拘リ不容易被思召御願仰立之儀被仰付候由、其方丈役者中〻申来、当大僧正被致承知、右一件如何様ニも取りもつれ候共、従御門主様御願被達仰候上ハ、重き御儀ニ御座候得者、速ニ可済寄儀与被致大慶、拙僧共一同難有仕合奉存候、何分此上御門主様御威光を以宗義相立候様御願被達仰候様、当大僧正始外十七檀林并拙僧共一同奉願候、尤品ニ寄各之内御壱人下向可被成之段、御苦労之御事ニ候得共、早速御下向御願被下候様幾重ニも奉頼候、当大僧正方今日御用番老中掛リ寺社司江右為願被致伺公候、此等之趣御奏達奉希候、猶委細書追々可得貴意候条不能審候　恐惶謹言

二月十七日

小山侍従様
薗　刑部卿様
樫田筑後守様

㊁

御門主御願書

御口上覚

一浄土真宗与申者、則浄土宗之宗名ニ而、御先祖様別而神君様厚神慮を以、御宗門ニ被為定置候ニ付、御条目之通一宗為尊崇、當御門主被為立置、殊御代〻様御猶子ニ被成置候故、御威光を以一宗光輝相続ニ随ひ、當御門室ニ茂御相続之御事候、然者於御門主者、至而御大切之儀故、他門ニ而右宗名相唱候之様相成候而者、甚以御苦慮思召候尤浄土真宗与他門ニおゐて相唱候而者当宗ニ相障候儀者、旧冬被仰渡候通、於他門浄土真宗与相唱候儀者難相成候段、猶亦被仰付被下候様、呉〻御願被成候間、速御聞済被進候様、御取持之儀頼思

召候　以上

知恩院宮御使

小山侍従

(四)

同御願御殿副書写

口上覚

去午年両本願寺ゟ願出候者、門末一統浄土真宗与相唱度旨、依之増上寺へ右之趣を以於浄土宗相障儀無之哉与御尋、就夫当山知恩院等江茂申来候故、重々相障筋申遣、於増上寺其趣相調書付、於御奉行所浄土宗ニ相障候趣を以、於奉行所者一向宗与御取扱有之旨御申渡、其趣当山方丈ゟ早速被申上、達御聴御満悦思召候、然処当正月廿六日当年宗判之儀者、従来之通浄土真宗等与肩書有之候而者、浄土宗寺院ゟ差支かへ印形致し候様御申渡候よし、此義今年ゟ不相改候而者、当浄土宗江差障之儀不相立様ニ相聞、一宗之僧徒甚倒惑次第、御門主をゐても甚気之毒ニ思召候、然者先達而御申渡候通今年ゟ唯一向宗与御取扱有之、当浄土宗へ不相障様御門主御願被仰入候、委細之儀別紙ニ相記し被仰入候　以上

(四)

御別紙御文言

覚

一圓光大師浄土宗御開創之儀者、大唐善導大師より相承之宗名ニ而、両大師制作之書之内ニ浄土真宗与申趣之宗名歴然与有之候、依之圓光大師凡六百年已前当山知恩院地おいて、念仏弘通、浄土宗門始而御建立之御事候、此外ニ浄土真宗与申宗名無之事候、然者当山者浄土宗根本之地、凡六百年以来無断絶宗脈伝々相承致し来候事候、依之浄土一宗惣本山之勅書等被成下、世々天子大師等之謚号有之事ニ御座候、彼宗々浄土真宗与申者、五百年来之宗名之様ニ申立候得共、年来一向宗又ハ本願寺門徒等与唱来候、若浄土宗与申宗名古来より一向宗之本名ニ候得者、此度改御願不及申上事与存候

一圓光大師御開宗之節者、上足之弟子数多有之候得共、

勢観上人・聖光上人等常随修学浄土宗門正統伝授之人勅修御伝之表明白ニ候、今事宗門僧徒者皆正統之流派ニ而、浄土真宗之法門を弘通致も無異違事候、然処彼之一向門徒ゟ圓光大師を申立附法相承之弟子抔と申事も相聞候得共、決而有之間敷事候

一圓光大師御在世之節者、三帝之戒師与被為成、其外月卿雲客諸宗之碩徳各戒師与仰レ、圓頓戒并念佛弘通有之事候、然者真宗浄土之僧徒行義ニおゐてハ随分之持戒、如法之人弘通すへき法問ニ候、依之東照宮様・台徳院様当山江被下置候御条目之通、当宗門之僧徒者宗脈戒脈皆致し相承之事候、然處妻帯肉食之人々弘通する法門を浄土真宗与可称事にハ無之、因茲右等之人者、圓光大師御在世之時より御門弟擯斥之人ニ而、勅修御伝所々ニ嫌去致し有之事ニ御座候

一御当家御先祖様已来当浄土御宗門ニ而、別而神君様厚御神慮を以、当山知恩院之儀者浄土宗惣本山之事故、結構ニ御建立御菩提所ニ被為定置、且又於関東十八檀林被遊御建立、其上為浄土宗門尊重光栄格段之思召を以、当御門主を被為立置、御代々公儀御猶子ニ而御相続、自宗ハ勿論、他門尊崇無他事御事御座候、然処彼門徒浄土真宗与称し候時者、御宗門根本之浄土宗今更仮宗偽宗之様ニも相聞へ、一宗御惣統之御門主ニ御座候得者、別而御痛心之御事ニ御座候、依之不得止右条々之趣粗被仰入候、尚又委細相障筋之儀御尋も御座候ハヽ、知恩院役者・増上寺役者へ御尋可相成候　以上

知恩院宮御使

二月　　小山侍従

(四)

御殿御使小山侍従船川渡之写

知恩院宮御宗門為御用、小山侍従江戸江被遣候間、路次中船川渡之所々無滞様、可肝煎者也

安永五申
二月廿八日　　大炊御印

従京都江戸迄
船川渡之所々
年寄
肝煎

(四)

御門主呈書御文言

依知恩院宮仰一筆致啓上候

此度就御宗門之儀、以使者小山侍従別紙書付之通、御願被成候間、宜御沙汰可被進之旨御座候　恐惶謹言

二月廿六日　　覺了院僧正書判

松平右近将監様

松平右京大夫様

松平周防守様

板倉佐渡守様

田沼主殿頭様

(四)

寺社司江御書御文言左之通

依知恩院宮仰一筆致啓上候、此度就御宗門之儀、以使者小山侍従別紙書付之通御願被成候間、宜御取持頼思召候　恐惶謹言

二月廿六日　　覺了院僧正書判

土屋能登守様

牧野越中守様

太田備後守様

土岐美濃守様

知恩院蔵『宗名一件抜書』